

# 「女子力」使用に見られるジェンダー役割の主体的再生産

## —20代男女のインタビュー調査から—

13L027 熊倉 千夏

### 序章

「女子力」「女子」この言葉が誕生してから、十数年が経つとされる。日常生活で「女子力」や「女子」という言葉を自分自身が違和感なく使用していることに、ふと気づいた。そのとき、「女子力」って何だろう？「女子力」とされるものは具体的にどういうことなのだろう？と「女子力」に対する疑問が浮かんだことが本調査に至るきっかけであった。特に興味があったのは、周りの同年代の人たちがどのように「女子力」を解釈しているかである。

本研究では、若い男女が「女子力」という言葉をどのように使用し、どのように解釈しているかを明らかにすることを目的として、9名の20代前半男女を対象にインタビュー調査を実施した。以下では、本論の構成とその概要を述べる。

第1章では、従来の意味とは異なる「女子」が誕生した背景をまとめた。「女子」の誕生には、女性たちの生き方の多様化と外見への自己実現欲の現れが関係している。「女子」という言葉には、社会的立場や年齢によって、分断されてきた女性たちを一つにする意味が込められている。そして、ファッション誌によって誕生した「女子力」は、曖昧な定義づけがなされている。「女子力」をめぐる解釈は主に二つに分かれている。一つは、結婚をする手段としての対男性への「女子力」である。もう一つは、従来の女性役割を脱却する女性の総合能力としての「女子力」である。しかし、これらの議論からは個々人がどのように「女子力」が解釈されているかは、語られていない。実際に「女子力」という言葉がどのように使用されているかを調査したものと、菊地夏野の研究を取り上げている。また、本調査では、小倉千加子の論じる「女の子の国」のルールという概念を分析枠組みとして採用した。「女の子の国」とは、自己抑制や女の子同士の横並びの関係の維持などのルールを示すもので、インタビュー調査の語りを分析する上で役立つ概念である。

第2章では、実際に調査の方法や被調査者のデータをまとめた。今回、インタビュー調査を採用したのは、本研究が「女子力」について、個々人がどのように解釈し、使用しているか、個々人の経験に基づいた調査をすることを目的とするからである。対象者の実体験や考えなどのリアリティが本研究には必要である。調査は、20代前半男女を対象とし、男女別3名のグループインタビューを各1回、女性6名に個人インタビューを実施した。

第3章では、インタビュー調査から、若い男女がどのように「女子力」を解釈し、位置づけているかを6つのテーマに分けて、分析した。1つ目は、「女子力」という言葉は、若さと結びつい

ており、同世代間のみで通用する言葉として使用されていることを述べる。その「女子力」とは、従来の「女らしさ」として捉えられてきた、外面や内面への気遣いとして解釈されている。2つ目は、女子が使用する「女子力」は、ほめ言葉としてであり、他者を批判するものではないということ述べる。それは、「女の子の国」のルールである横並びの関係を維持し、強化するという意図があり、みんなと同じことが求められていることを示している。3つ目は、男子からみた「女子力」とは、家事能力などの従来の女性役割が担えるかどうかを判断するものであることを述べる。しかし、男の子の国のルールである、「勝つ」ことを脅かすものではない程度の「女子力」でなければならない。4つ目は、「女子力」とは、「女子」である自分を他者から意識させられるものであることを述べる。「女子」としての自分の価値は、他者の目に映る自分でしか判断されないからである。5つ目は、メディアの普及とともに、「女子力」が消費と結びつき、若い女性たちの消費活動を促していることを述べる。これまでの「女らしさ」はもともと女性に備わっているものとみなされていたが、「女子力」という言葉によって、女性自らが積極的に女性性を獲得しようとしていることが見られる。6つ目は、「女子力」男子という存在を取り上げ、こうした「女子力」の使用の在り方をおして、既存のジェンダー役割を揺るがす可能性があることを述べる。若い男女の間で、ジェンダー役割の意識が薄まっている可能性を指摘する。

終章では、本調査から、分析したことを先行研究と照らし合わせ、結論づけている。本調査で明らかになったのは、「女子力」という言葉が、若い男女の間で、従来の女性役割を内面化することを促す作用を持っていることである。さらに、メディアが提示する「女子力」を若い女性たちが積極的に、また、主体的に消費していると言える。若い女性たちの中で「女子力」という言葉をおして、既存のジェンダー役割が再生産されている。むしろ、女性が主体的に女性性を消費している点において、新しいジェンダー役割を生んだと言えるだろう。

## 第1章—「女子」「女子力」とは

本章では、「女子」や「女子力」という言葉がどのように生まれ、どのような意味で語られてきたのか説明する。21世紀になってから、ファッション誌によって従来の意味とは異なる「女子」が誕生した。その「女子」と派生語である「女子力」がどのように広まり、どのような意味を込められてきたのかをまとめる。また、「女子力」はどのように解釈され、どのような位置づけであるのかを明らかにする。

### (1) 「女子」とは

まずは、「女子」がどこから、どのような意図で誕生したのかを見ていこう。米澤泉によれば、1998年に創刊された初の化粧情報誌『VoCE』（講談社）において、創刊時からの人気マンガ家である安野モヨコの連載記事である「美人画報」誌上で、安野が「女子」や「女子力」という言葉を頻繁に登場させたことがそもそも「女子」ブームの始まりなのだとしている<sup>1</sup>。しかし、「美人画報」誌上では、「女子」や「女子力」という表現が必ずしも多用されていたわけではな

い。だが、その後、「美人画報」の連載をまとめた単行本の出版により、「女子」や「女子力」という言葉が一般化したとされる<sup>2</sup>。

ここで注目したいのは、本来「女子」とみなされる10代・20代前半ではなく、これまで大人の女性とされていた20代後半・30代以上の女性が、「女子」を肯定的に名乗っていることである。かつては、未成熟な「女子」から脱却し、“成熟”した大人の女性へと変貌することを期待され、憧れを抱いていた女たちが、今や「女子」から降りないことを宣言している。その要因として、2つを挙げることができるだろう。1つは、河原和枝の指摘だが、男女雇用機会均等法（1985年）が施行され、女性のライフコースが多様化したことをきっかけとし、30代・40代の「常識」を求められる年齢の女性たちが男性による眼差しや性差を意識しないことを望んだことである<sup>3</sup>。女や女性というステレオタイプを背負わされず、学生時代の男子と女子という対等な感じを彼女たちは求めたのだと言える。そしてもう1つは、米澤による指摘だが、1990年代に、外見至上主義社会が到来し、ファッションよりも化粧という「コスメの時代」がやってきたことである<sup>4</sup>。さらに美しくなりたい、いつまでも若くありたいという女性たちの自己実現欲が強まり、成熟や老いを否定することが可能になった。このことが「大人女子」や「美魔女」の誕生につながっているとされる<sup>5</sup>。それについて米澤は、「女子」という言葉の裏側には、何歳になっても主役を降りたくない、脇役に回りたくない、という女性たちの願望が存在すると述べている<sup>6</sup>。さらに、米澤は、「女子」という言葉は女性を既婚や未婚、キャリアや主婦といった立場に分かつことなく、一つにするとも述べている<sup>7</sup>。21世紀は、これまで赤文字雑誌が提示してきた、結婚して専業主婦になるという女性の道が崩壊してきたとされる<sup>8</sup>。タイトルロゴが赤い字で書かれていたことに由来する赤文字雑誌とは、いわゆる女子大生をターゲットとしたコンサバティブ（保守的）なファッションの雑誌であり、代表格の光文社の『JJ』を筆頭に、小学館の『CanCam』、講談社の『ViVi』、主婦の友社の『Ray』の四誌を指す<sup>9</sup>。実際、専業主婦かキャリアかという二択ではなく、主婦でもパートで働く人や、一度は結婚して離婚する人など女性の道は大変多様化している。そういったさまざまな立場の女性たちやあるいは同じ趣味嗜好を持つ女性たちが「女子」という言葉によって、一つに括られるのである。また、多様な女性たちを一つにくくる言葉としての「女子」ということにかかわって、馬場伸彦は、次のように述べている。

たとえば「腐女子」「カメラ女子」「森ガール」「大人女子」などが思い付くが、ここで使われている「〇〇女子（ガール）」という言葉は、グループを括る基本属性となるだけでなく、それぞれの嗜好対象を媒介にして「仲間意識」を涵養し、他者との関係性を構築する鍵概念となっているのである。<sup>10</sup>

なぜ、「仲間意識」や「他者との関係性」を女性たちは求めるのだろうか。それは、小倉千加子の議論によれば、女子は常に「みんなはどう感じているのか」を、アンテナを立てて探っていなければならないからである<sup>11</sup>。女子は「みんな」と同じであることに価値を見出し、絆を強めていくことを大切にするのである。これにかかわって、さらに、河原によれば、女性は概して社会化のプロセスにおいて男性よりも「世話（配慮）の倫理」を強く内面化している<sup>12</sup>。「世話

（配慮）の倫理」とは、規則よりも他者との関係性を重視する倫理観のことであり、心理学者のキャロル・ギリガンが論じたことで有名であると河原は述べている<sup>13</sup>。例えば、「世話（<sup>ケア</sup>配慮）の倫理」を女性たちは強く内面化することによって、女性たちは、もめごとが生じた場合、他者との関係性を保つために、既存のルールを変更して、衝突を回避するのである<sup>14</sup>。彼女たちにとって、集団やグループの中に安定して位置付けられることは必要不可欠であり、集団やグループに帰属していることが、ある意味、「女子」であることを証明することなのではないだろうか。

その象徴とも言えるのが、「女子会」であろう。「女子会」の「会」のニュアンスには、「女子」同士の絆を強く意識させる側面があると河原は指摘する<sup>15</sup>。また、河原は、「仕事だけでなくプライベートの悩みも共有できる」「女子会」の魅力には、特別なものがあるとも述べている<sup>16</sup>。「女子」の横のつながりが、「女子会」によって強固になっていると言える。

そして、2013年には女子のデフレが起き、メガネ女子、肉食女子、こじらせ女子は言うに及ばず、還暦女子、マシュマロ女子、果ては残業女子まで登場したと米澤は述べている<sup>17</sup>。どこまでも広がりを見せる「女子」だが、しかし、現状では向かい風が吹いている。米澤によると、アラフォー世代が一生女子宣言をする一方で、20代、アラサーの「女子」離れも進んでいるようであり、世代間によって、「女子」の解釈、使用をめぐるずれが生じてきていると述べる<sup>18</sup>。さまざまな立場にいる女性を一つにするはずの「女子」という記号が、主に若年層の価値観では、受け入れにくくなっているとは、なんとも皮肉な話である。

## （2）「女子力」とは

では、「女子」という言葉には、女性の立場に関わらず、彼女たちを一つにする意味が込められているのに対し、「女子力」はどのような意味を持つのだろうか。『現代用語の基礎知識2007年版』では、「女子力」とは、「キレイになりたいと願い、行動する力。ダイエットや美容、ファッションから恋愛まで幅広い。」と定義されている<sup>19</sup>。キレイとは一体どのような意味なのか、恋愛まで幅広いとしているが、定義自体が大変曖昧ではなかろうか。なぜこのように「女子力」は、あまりにも漠然とした定義がされているのだろうか。

「女子力」が爆発的な影響力をもって普及した背景には、この言葉が消費と直結したという事情があったとされている<sup>20</sup>。2000年代には、さまざまなファッション雑誌の記事に「女子力」という文字が躍っており、いわば、「女子力」という言葉が、消費者（特にファッション雑誌がターゲットとする女性たち）の消費を促すうえで戦略的に使われていたと言える。また、河原は、「女子力」は「つける」もの、「アップ」するもの、「養成」するものとされ、そのための化粧品やグッズやスキルを提供する巨大な女性向け市場と一気に結びついたのであると述べている<sup>21</sup>。ファッション雑誌から広まった「女子力」はますます拡大解釈されていく。2007年に甲南女子大学がブランド戦略として「女子力」を掲げたキャンペーンを行った<sup>22</sup>。それについて米澤は、「女子」であることを意識し、「女子」の能力を「女子」の集団である「女子」大で高めていこうとする大学の戦略によって、「女子力」は新たな意味を賦与されることになったと述べている<sup>23</sup>。そして、2009年にはついに新語・流行語大賞に選ばれるのである<sup>24</sup>。

「女子力」をめぐるのは、論者によって、主に二つの視点があると考えられる。一つが、もともとその言葉の意味するところとしてとらえられてきた、対男性に対する「女子力」である。すなわち、男性を惹きつける手段としての女子力という視点である。二つ目が、これとは、まったく逆の視点である。それは、女子の総合力としての女子力である。つまり、女性が好きに生きるための女子力という視点である。

現代の「女子」を取り巻くさまざまな問題や状況について研究者やジャーナリストである女性5人と男性1人というざっくりばらんな座談会の中で、「女子力」がどのように語られているのを見てみよう。まず一つ目の対男性に対する女子力という観点からは、座談会参加者のライターの水森路代は次のように語っている。

今、女子力の高い人はサッカーに行く人という感じがします。男の人の趣味に合わせるこそが女子力だと思います。どちらかというと、女子の慣れ合いに染まらないということのほうがモテるためには必要なんですよ。男性が多いところに入るのが、一番結婚できる確率が高くなる。だから、意外と今まで考えられていたような女子力はモテるためには必要ないかもしれないですね。<sup>25</sup>

西森が語る女子力とは、結婚するための手段としての対男性への女子力である。注目したいのは、ファッションや美容という女性誌が提示してきた女子力と異なるという点だろう。むしろ、女子力についての伝統的な解釈が前面に出ていると言える。

もう一人の座談会参加者、詩人兼、社会学者の水無田気流も、西森と同様な見方をとる。

そういう消費メディアにあおられて自分磨きばかりしていると、むしろ磨きすぎて相手がいなくなる。よく磨きすぎた日本刀は、近寄るだけで、触っていないのに斬られるというじゃないですか。磨きすぎて、名刀どころか妖刀になっている可能性があるなと思います。斬るターゲットを見つけたら、矢も盾もたまらず向かっていく。<sup>26</sup>

水無田の語る女子力もまた、斬新には聞こえるが、伝統的解釈を繰り返しているように見える。つまり、水無田のとらえる女子力も、結婚するための手段として男性に向けられるものであり、むしろ、メディアが自分磨きを助長し、行きすぎると不気味な能力になりかねないと指摘している。西森も水無田も、男性に媚びることや取り入ることで、女の幸せと考えられていた結婚へと導くための能力として「女子力」を位置付けているように見える。

次に、二つ目の女子の総合力としての観点から、河原は次のように述べている。

「女子」の語が普及し、「女子力」がブレイクするにつれ、女性が職場で能力を発揮する場合にも「女子力」の語が用いられるようになる。…（中略）「女子力」は、対男性だけでなく、広く対社会的な女性の総合能力を表す言葉として用いられるようになったのである。<sup>27</sup>



もともと「女子力」というのは男性に向けられている力として理解されていたが、言葉が広く普及したことにより、女性の総合能力としても捉えられるようになった。また、米沢もファッション誌における「女子力」について、次のように議論している。

ファッション誌の「女子力」とは装いの持つ力なのだ。装いとしての「女子力」は、基本的に男性に向けられているものではない。むしろ、「女子」として生きていくための原動力となっているものである。装いの力によって、女は「女子」となる。妻や母といった社会的役割、良妻賢母規範を軽やかに脱ぎ捨てるファッション誌の「女子力」はもっと評価されるべきであろう。<sup>28</sup>

つまり、「女子力」とは、「女子」がなりたい私になるために、ファッションや化粧などで自己プロデュースすることを指しており、そこには社会的役割や規範が存在していないと米沢はファッション誌的観点から述べている。河原も米沢も、女子力を女性のために向けられた能力として肯定的にとらえていると言える。

このように二つの異なる解釈がされてきた女子力であるが、一つ目は既存のジェンダー役割を脅かさずに、むしろ再生産を促す作用を持ち、二つ目は、これまでの女性役割の脱却を可能にする作用があると言えるだろう。果たして、「女子力」はどこを目指して、どこに行きつくのだろうか。

これらの女子力の二つの視点に対して、男性の観点から、社会学者の古市は、ある意味批判的な視点を提示している。前述の座談会において、女性誌の「30日コーデ」という記事について、古市は、「“女子力”というのは、誰のためかわからないような努力を黙々と続け、しかもその努力を人には見せない修行僧のような能力だと思います」と述べている<sup>29</sup>。男性にとって、「女子力」は理解しがたい特別な能力として捉えられているようである。

上記で議論した女子力についての解釈は、しかし、実際に女子力という言葉がどのように利用されているのかを示しているものではない。女子力という言葉が実際にどのように利用されているのかを調査したものとして、菊地夏野の研究が挙げられる<sup>30</sup>。菊地は、大学生を対象に、782人に対して「女子力」が実際に若い男女のあいだでどのような意味合いで使用されているかについて、アンケート調査を実施した。そこで明らかになったのは、ジェンダー規範と能力主義の結合であった<sup>31</sup>。菊地は、「女子力」はその文脈性や多義性ととも、固定的なジェンダー規範によって構成されていると述べている<sup>32</sup>。また、「女子力」の主要な内容は家事能力および服装やメイクなどの外見の美、マナーなどと認識され、必ずしも結果を得られなくても、努力すること自体に価値があるものなのであるとも菊地は述べている<sup>33</sup>。

菊地の調査は、人々がどのような意味を込めて「女子力」という言葉を、使っているのかを分析しているという意味で、意義深い。しかし、他方で、個々人が「女子力」という言葉をどのように解釈しているのか、それらの解釈がどのようなニュアンスを伝えるのか、ということまでは明らかにできていない。本研究では、「女子力」という言葉が、どのような位置付けとして、どのように作用しているのかという点についてインタビュー調査を通して分析していく。

### (3) 女の子の国のルール

本研究では、分析枠組みとして、心理学者の小倉千加子の論じる「女の子の国のルール」を用いる。小倉は、『女らしさ入門(笑)』という書籍で、女らしさは、どこからやってくるのか、女らしさはいつから自覚されるのか、そして、そもそも女の子らしさとは何か、ということについてわかりやすく述べているが、説明の中心概念となるのが「女の子の国のルール」である。後に詳しく見ることとなるが、第3章で描かれる女子たちによる「女子力」をめぐる語りは、まさに、この「女の子の国のルール」を指し示す。その意味で、「女の子の国のルール」を分析枠組みとして用いることは、有効であると考えられる。また、それに対応して、「男の子の国のルール」も「女子力」をめぐる語りを分析する上で、必要な概念である。

長い間、結婚は女の人が生活するためのほとんどたった一つの手段であり、そのために女らしさを身につけなければならなかったと小倉は解説している<sup>34</sup>。その女らしさというのは、男の子に気に入られ、男の子の世話ができ、男の子の機嫌を損なわない性質のことと小倉は述べている<sup>35</sup>。女の子は、早くから身体の内側の自分と、他者の視線を含めた「鏡」に映った自分が違うことを認識するという。女の子は可愛くなければならない、可愛くなければ女の子ではないという他者からの視線に、女の子たちは常に晒されている<sup>36</sup>。そして、世界の中心にいるのは男の子であって、女の子は中心にはいられないということに悟るという<sup>37</sup>。例えば、男の子はわがままでも許されるが、女の子は常に我慢することを求められる<sup>38</sup>。さらに、男の子の欲求に従って自分の欲求を抑えること、つまり、「自己抑制」を2歳の時から女の子は身につけるとされる<sup>39</sup>。「自己抑制」とは、自分のしたいことより、相手がしたいことを優先させることである<sup>40</sup>。「女らしい」というのは、「男子に上手に負ける」というメッセージであり、一方、男の子の国では、「勝つ」ことが唯一絶対のルールである<sup>41</sup>。それに対し、自分というものを持たないこと、いつもその場の「みんな」になること、それが「女らしさ」であり、「女の子の国のルール」である<sup>42</sup>。

小倉の論じる「女の子の国のルール」を、アニメの世界において論じるのが、評論家である斎藤美奈子の『紅一点論— アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』である<sup>43</sup>。斎藤は、子ども向けの特撮とアニメの世界を「アニメの国」と呼ぶが、その「アニメの国」は、「男の子の国」と「女の子の国」で成り立っており、大人社会の縮図であるとした。斎藤によれば、アニメの国においても、女の子は「女の子の国」のルールに従って生きている。「女の子の国」とは、ファッションと恋愛（とその延長にある結婚や家庭）が価値を持つ私領域である<sup>44</sup>。女の子にとって、「着る」ことは「生きる」ことであり、女の幸せと考えられていた結婚やいずれは家庭に入ることが当たり前であると考えられていたからであろう。また、女の子の国のチームは、同年代の少女だけで構成された男子禁制の女子高スタイルで成り立っており、私的な仲良しグループ以上のものではないという<sup>45</sup>。1節でも述べたように、女の子は常に横並びの関係であり、「みんな」同じでなければ、自己を保てないのである。

斎藤が描く「女の子の国」が、現実世界の女の子のあり方を示しているのだとすれば、女の子たちは、私領域の中で、ファッションと恋愛に価値を見いだしつつ、他方で、女の子たちの横並びのグループの中で、自己抑制しながら、突出しないように生きている。そのように生きること

が「女の子らしさ」を体現することとなる。インタビューで示される「女子力」は、こうした女の子の国に生きる女の子たちのあり方と、共鳴しているように思われる。本研究では、この「女の子の国のルール」という概念を通して、インタビューで語られた「女子力」の意味を理解することを試みる。

## 第2章—研究方法

### (1) 調査方法

今回の調査では、「女子力」という言葉が、個人によってどのような場面で使用され、また、どのように解釈されているのか、個人の経験に基づく調査を進めるため、インタビュー調査を実施した。語り手との会話を通して、個人の体験や意識にあるリアリティを明らかにすることを本研究は求めた。これら個人の体験や意識にあるリアリティは、統計データからは読み取ることができない。インタビュー調査では、対象者がみずからをとりまく世界をどのように理解し、そこにどのような意味を見出しているかという主観的意味世界がどのように構築されているかにこそ、リアリティが存在する<sup>46</sup>。個人が、ある事柄や言葉をめぐって、どのように個人の経験を理解し、また、個人のリアリティを構築しているのか、統計データからは読み取ることができない、主観的意味づけの在りようを、インタビューデータは提示することができる。また、インタビューでは、語り手の声や口調、表情などの情報を得ることもできる。これらの要素を手がかりにして、語り手にとっての「女子力」の位置づけや考えをさまざまな角度から分析することができる。

あまり普段考えないであろう話題である「女子力」について語ってもらうため、まずは、グループインタビューを実施した。グループインタビューは、複数人の会話形式で実施されるものであり、相互の意見や経験を引き出しやすくなる<sup>47</sup>。さらに、個人の経験や考えに焦点を当て、より深く「女子力」について語ってもらうため、個人インタビューも実施した。なお、インタビューでは会話ができる余地が十分にあり、インフォーマルな側面を持つ非構造化インタビューを採用した<sup>48</sup>。非構造化インタビューでは、質問はあらかじめ厳格に用意されるのではなく、調査者の関心に基づいて、その場の状況やインタビューの進展によって、適宜発せられる<sup>49</sup>。

### (2) 調査の概要

本インタビュー調査は、「女子力」という言葉が、若い男女のあいだで、どのような場面において使用され、その際、どのような意味合いが含まれているのかを探るために行われた。調査の対象者は筆者と同年代であり、スマホやSNSを情報手段のツールとして使用しているであろう20代前半の男女に的を絞った。筆者の友人知人の協力を得て、新潟県内在住の男性3名、女性6名の計9名にグループインタビューあるいは個人インタビューを実施した。なお、グループインタビューは、男女別3名ずつの各1回のみとし、20分～30分程度で行った。個人インタ



ビューは女性のみを対象とし、1人15分程度で行った。また、グループインタビューの被調査者にも追加で個人インタビューを行った。調査期間は、2016年9月～10月である。対象者の選出方法などは極めて限定的であり、単なる一例に過ぎないが、質的調査の結果として紹介する。以下は、被調査者の属性を示す表である。

〈被調査者データ〉

被調査者	性別	年齢	職業	家族構成
Aさん	女	21	大学生	父、母、姉、兄
Bさん	女	21	大学生	母、兄、猫
Cさん	女	22	大学生	父、祖父、姉、姉
Dさん	男	23	大学生	祖父、祖母、父、母、妹
Eさん	男	20	大学生	父、母、兄
Fさん	男	21	大学生	父、母、妹
Gさん	女	21	幼稚園教諭	父、母、兄、猫
Hさん	女	21	大学生	父、母、兄、兄
Iさん	女	21	パート	父、兄

### 第3章—インタビューから発見したこと

今回の調査では、若者世代が「女子力」をどのように捉え、どのように位置づけているのかが赤裸々に語られた。これまでの「女子力」についての解釈や議論は、彼・彼女たちを無視してきたように思う。本章では、今まで見落とされてきた個々人がメディアの提示してきた「女子力」をどのように消費し、内面化しているのかを明らかにする。果たして、これまで議論されてきた「女子力」が通用するのであろうか。ここからは、6つのテーマに分けて、議論していく。

#### (1) 伝統的な女性役割と結びつく「女子力」

「女子」という言葉は、年齢や規範を軽やかに飛び越えると米澤は論じていたが、果たしてそう言えるのだろうか。菊地の調査において、「あなたは、何歳の女性まで『女子』という言葉を使用できるか」という問いに対して、「20代前半」「20代後半」と答えた者がほとんどだったという結果がある<sup>50</sup>。インタビューした女性たちも自分より年上の人に対して、「女子力」とは言わないとしていた。それはどうしてなのか尋ねると、大学生のCさんは、「その、年齢が近いから、対等に感じて、自分とすごい比べちゃって、なんか、自分と比べてすごい女子力あるなあって思うし、お母さん世代だと比べないから、ただ単にすごい、なんだろう、何の感情も、なんか、比べたりせずに、なんか、すごいなあって思うからなのかな」と答えた。同年代の子に対しては、自分と比較する対象になるが、年上の女性だと、純粋に尊敬に値するからではないかと彼女は語った。女子にとって、年齢や立場などが同じであることは重要な関心事なのであろう。あるいは、「なんか、先輩とかに、いや、そんな上すぎる方には、ちょっと、恐れ多くて…」と幼稚園教諭のGさんや「なんか、大人の女性に女子力って使っているのだからっていう（笑）なんか、申し訳ない気持ちが…」とパート勤務のIさんは述べた。彼女たちは、「女子力」という言

葉にきつと、未成熟な印象を抱いており、年上の大人の女性には相応しくない言葉ではないかと解釈しているのだろう。また、大学生のHさんは、「なんか、女子…女子のなんか、年齢？年齢制限みたいな（笑）なんか、40代とかには、女子力ってあんま言わなくないですか？（笑）なんか、言えなくない？」と述べ、「女子」は若い女性を指す言葉であるという。

また、今回のインタビュー調査では、「女子力」は女性にだけ使用される言葉ではないということが分かったが、男性でも「女子力」とは、女性と同じく、若さと結びつくらしい。「5コ上の、私、兄がいるんだけど。お兄ちゃん割と、なんか、お風呂上りに、こう、ボディクリームとか塗ったり…化粧水塗ったりとか、してて…でも、それを見て、女子力高いとは言わない。ちょっと気持ち悪いんだけどってなる（笑）」と大学生のAさんは嫌悪感を抱くという。続けて、「なんかさ、こう、境界線は分からないけどー、やっぱ、ちょっと若い男の人とかがやってたら、女子力高いかもね～とか思うけど、なんか、ある一定の年齢超えちゃうと、ちょっと、それはもう、違うかも…。女子力ではなくない？」と述べた。大学生のAさんの語りからも、「女子力」とは、同世代間でのみ通用する若者言葉として扱われていることが示される。これらのことから、やはり、年齢という壁はそう容易く超えられないことが現実として浮き彫りになった。それには、女性の価値が「若さ」と「美しさ」で評価されてきたことが大きく関わっているだろう。

他方、今回の調査では、さまざまな場面において、女子力を示すものとして、「気遣い」「気配り」というキーワードを度々耳にした。例えば、「女子力」と聞いて思い浮かぶキーワードを挙げてもらった際、「めっちゃ気遣いできるとか。料理取り分けるよーとか、さりげない気遣いは女子力」と大学生のBさんは答えた。Gさんは、「ま、例えば、デートとかの時に、なんか、ちょっとかわいい服着たりとか。…なんか、ねえ、ちょっと、好きな人のために気遣うみたいな。化粧とかさ…」と述べている。前者の、飲み会の席などで料理を取り分ける「気遣い」についての言及からは、細やかなところにも気がつくことが女性という意識が垣間見える。

後者の、好きな人のために服装や化粧などに「気を遣う」ことは、可愛くなければ女の子としての価値がないという女の子の国のルールに則っていると言える。さらに、「女子力」あると思う人を挙げてほしいという問いに対して、Hさんは、「え、いつもなんか、髪とか、化粧とかも、洋服とかも、バッチリ…バッチリっていうか、なんか、ちゃんと決まってる人？とかかなあ～…。あ、なんか、見た目には気を遣ってる感じが、女子力あるなみたいな。見た目かな」と答えた。女の子は常に、内側の自分ではなく、外側の自分、つまり、他者の視線を意識せずにはいられないようにできている。「可愛い」と評価されなければ、女の子としてみなされないからである。

一方、男性が思う「女子力」を感じる人とは、「まあ、さっきの美意識みたいなのと似てるかもしれないけど、なんか、身だしなみに気を使う子。なんか、小奇麗とかじゃなくても、なんか、清潔感があったりだとか」と大学生のFさんは述べた。キレイであること、つまり、だらしなくないことが女性であり、男性は女性の外側（外見・雰囲気）から内側（性格などの内面）を見ているのかもしれない。

上記のインタビューの引用から示されるように、女の子には、髪や化粧などの外見への気遣いと、他者への思いやりからくる行動という内面としての気遣いが求められている。女子として生きることは、このように内面、外面において他者からのさまざまな期待に応えることなのだと言

える。内面・外面共に、常に他者からの視線に晒されて他者の期待に応えるということで、「可愛さ」を実現することができるという、「女の子の国のルール」が、示されているのである。

## (2) ほめ言葉としての「女子力」と複雑な「女子」の関係

今回の調査によると、自虐する場合を除いて、女子が「女子力」という言葉を使うのは、基本的にほめ言葉としてであり、他者を批判するものではないようであった。どういう時に「女子力」と言うのか尋ねた時、「手作りのお菓子とか、手作りでお弁当持ってきたりとかする人を見ると、あ、女子力高いねって言うかもしれない」とAさんは述べた。手作りという家庭的な、従来の女性役割である側面に焦点を当てながら、それらが身につけていることを、Aさんは、「女子力」という言葉を使って、肯定的に評価している。

また、Iさんは「友だちが、エステ行ったり～、ネイル行ったりとか聞くと、あ、女子力高いね～とかをよく使ったりしますね」と答えた。エステに行ったり、ネイルに行ったりして、外見に対して気を遣っていることが、好ましいこととして、見なされていることがわかる。

さらに、Gさんは、「まあ、なんかそういう、気遣いができる女の子を見た時とか、わあ、すごい女子力高とか思うし～、なんか、ほめ言葉として使うかも。なんかちょっと、なんだろ、なんか、メイクとかちょっと変えたとかさ、なんか、ちょっとかわいくなるうって、頑張ってる子とか見ると、あ、女子力高いねって思うし、言いたくなる」と語った。Gさんにとって、女子力は「ほめ言葉」であると、明確に意識されている。外見に対する意識は、「頑張っている」として、好意的に評価されているのである。

Aさん、Iさん、Gさんの語りから明らかなのは、「女子力」という言葉が他者に対して使われる場合、それは、批判するためではなく、ほめ言葉として使用されるということである。そして、ほめ言葉としての「女子力」を互いにつたえ合うという行為は、「女子」の絆をさらに強くする効果があるのではないかということが示唆されるのである。「女子」という集団において、「みんな」と同じであることが重要であり、そこから飛び出ることがないようにお互いをけん制する意図も含んでいるだろう。なぜなら、「女子」である自分は、「女子」という集団によって、意識されるからであり、自分の居場所はそこにしかないからである。「女子」という共同体の中で「女子」同士が「女子」であることを意識せざるを得ないのである。

「ほめ言葉」としての女子力は、女の子同士を横並び関係につなげることを可能にする。「女子力」は、女の子の国の「みんな」同じ横並びの関係というルールを成立させているものだと言える。そのため、「女子力」が高すぎると、「女子」として認められないということになる。「みんな」の中から突出することは、「女子」という枠組みの中から、はみ出してしまうことなのである。それを示すのが、以下のBさんの指摘である。「女子力」は必要かという質問に対し、Bさんは、「でも女子力高すぎてもなあ～。ある程度、でも、みんな、なんだかんだ、一個ぐらい女子力高いところあるし～、それで十分かなとは思う」と述べた。

Bさんの言葉に示唆されるのは、上記でもあるように、どんな「女子」でも、「女子」であるがゆえに、すでに「女子力」が備わっているということではないだろうか。すなわち、「女子」

という集団に属するためには、どの「女子」も「一個ぐらい女子力高いところ」は必要とみなされていると言えるのではないだろうか。ただし、それ以上の女子力を持つことは、「女の子の国のルール」を破る行為とみなされるのではないかと思われる。必要以上に女子力を発揮し、突出することは、「女子」の枠組みを脅かすこととなるのではないだろうか。

女子力はほめ言葉であるが、同時に、「女子」の枠組みから突出することを規制するものでもあるということから言えるのは、「女子力」という言葉が、単純な意味を持つのではないということであろう。ほめ言葉として作用する「女子力」は、「女子」の枠組みに、彼女たちをつなぎとめると同時に、突出することをけん制する言葉でもあるのではないかと。

たとえば、Iさんは、「女の子らしい？ハンカチ、ティッシュ持ってるかとか、ネイルしてるかとか。でも、普通のことじゃないですか？普通…なんか、みんながしてること？なのかなあって思います」と女子力について述べる。「女子」として求められていることが、「普通」にできることが、「女子力」としてみなされている。特別なことができることではないと意識されていると言える。

同様にAさんも「やっぱり、料理できる女の子って素敵だよねみたいな（笑）え、なんか、自分ができないわけじゃないんだけどー、なんか、日々こう、インスタとかに自分の作った料理とかのつけてる女の子を見て、ああ、この子すごいなあとか思ったり…」と述べている。「自分ができないわけじゃないんだけど」と前置きすることによって、女子力は決して特別ではないことを示唆していると言える。

IさんやAさんの語りからわかるのは、特別さを求めない、普通の女子の普通の女子力である。女子力の普通さが共有されることで、どんな女子にも達成可能で、だからこそ、どの人も突出させないという暗黙の了解が感じ取られるのである。

先のIさんは、女子力のある人としてIさんが「よく行く服のお店の店員さん」を挙げている。「身近だと、私がよく行く服のお店の店員さん。いつもいい匂いがするんですよ。いつも甘い匂いとか、ネイルとか、髪もサラサラで～、言葉遣いもすっごい丁寧で、女子力あるなあ～って思います。常になんか、キラキラしてるっていうか。」これも、Iさんが普通さを強調したことと矛盾しているわけではないと思われる。「よく行く服のお店の店員さん」は身近ではあるが、決して、Iさんが普段属する女子のグループの横並び関係を脅かす存在ではない。そこには、「よく行く服のお店の店員さん」である女性の実際の私生活を知らないという部分も関係しているだろう。それは、Cさんが仲のいい友達は、私生活を知っているため、「女子力」を感じないというような発言をしたことから証明できる。私生活を知っているぐらい近い存在ではなく、実際の生態を知らない存在だからこそ、手放しではめられるのではないだろうか。

これまで見たように「女子力」はほめ言葉であると同時に、女子の枠組みを脅かすような行為をけん制する言葉でもある。だからこそ、普通さが強調されるし、自分との距離を測ったうえで、女子力は使われるし、誰でも「一個ぐらい」は女子力高いところをもつことが許されるのである。

### (3) 男子からみた「女子力」—「女子力」で他者判断

では、男性から見た「女子力」にはどのようなことが示唆されるのだろうか。男性のグループインタビューで明らかになったのは、男性にとっての「女子力」とは従来の女性役割を担えるかどうかの判断材料ということである。「あるとかより、ないの方が使う気がします。女子力ないって。…なんか、とりあえず、けなすみたいなの(笑)」とEさんが言うように、「女子力」は、「女子」ならあって当然であり、女子力がないことは、女性役割が担えないと判断されうるのである。それは、独身男性を対象にしたマイナビニュースのある記事によると、男性の思う「女子力」とは、「家事能力」、「男性を立てる」、「男性の気を引く」という回答からも指摘できる<sup>51</sup>。

男子が考える女性役割の具体的な例を挙げてみよう。例えば、「なんか、いざって時のために、絆創膏用意してる子とか…そういうなんかこう、気配りじゃないけど、用意周到さみたいな」とFさんは答えた。さらに、大学生のEさんは、「俺なんか、水素水飲んでますより、ちゃんと水筒つめてくるほうが女子力高いって思います」と述べた。男性の思う「女子力」の内容には、家庭的であることが優先されることがうかがえる。

Bさんは以前、男友達に「女子力」と言われた経験について、「なんか、みんなで～ご飯食べてる時に、なんか、家で鍋するみたいな。で、誰かが食材切らなきゃいけないみたいな感じになってくじゃん、どんどん。それを、普通に一人で行って～、切ったら、女子力高いねみたいなことは言われたことある。…うれしかったけど～、別に普通のこと～？みたいな。女子で集まったら、別に誰かしら、みんな、率先してやるし～、結構普通のことだから～、あ、そうなんだ、ここなんだ～みたいな(笑)」と話した。

EさんやFさんの「女子力」についての解釈、また、Bさんの経験から言えるのは、男性の考える「女子力」とは、将来の自分の奥さん候補として家事などの女性役割を担えることを意味するというであろう。他方、女性であるBさんの発言からも、男性は、料理の下準備をすることなど（「女子」なら誰でもできることとBさんには見なされているが）、家事能力を女子力と結びつけていることがわかる。

他方で、男子にとっても女子と同様に、「女子力」が高すぎる女子は、あまり受け入れられないらしい。大学生のDさんは、「あんまり完璧すぎると、あれじゃない？…なんか、全部、なんだろうな…全部きちっとしてると…」と口ごもる。なぜ、「完璧すぎる」ことは、男子を口ごもらせてしまうのであろうか？このことは、男の子の国では、「勝つ」ことが絶対のルールであるということと関係していると解釈できるのではないだろうか。このルールは、男の子に対しての場合だけでなく、女の子に対しても同様に適用される。そして「完璧すぎる女子」は、自分が「勝つ」ことを脅かす存在だとみなされるのではないか。

Fさんは、「女子力」が高すぎてもいけないが、「まあ、ほどほどには欲しい…」と答え、全く「女子力」がない「女子」についても否定している。男の子にとって、「女子力」は家事などの女性役割を判断するものであることからして、納得できることである。1章2節で言及した水無田の「磨きすぎた女子力は妖刀」という発言を肯定していると言えるだろう。「女子力」が高すぎると男子にも女子にもプラスに捉えられない危険性ははらんでいる。男子にとっては、自分を脅かすものとして、女子にとっ



ては、女子の横並び関係を脅かすものとして、「磨きすぎた女子力」は、敬遠されてしまうのである。

#### (4) 他者から意識される「女子力」

今回の調査で、あなたは自分自身に「女子力」があると思うかと尋ねたところ、全員が口をそろえて「ない」と答えた。どうしてそのように思うのかと聞くと、Cさんは、「やっぱり、自分と、私はSNSになんか、載せられるような料理を作らないから（笑）…なんか、載せてる子ってイタリアンとか作って、載せてるのね」と答えた。やはり、スマホ世代の若者たちにとって、SNSの影響は絶大なのである。SNSが普及したことによって、いつ・どこで・誰（が）と・何をしたという情報がリアルタイムで入手できるようになった。そして、SNSでは、手軽に誰もが自己表現をすることができ、他者との関係をも構築することができる。Cさんの場合、SNS上の「他者」と「自己」を比較することで、「女子力」を捉えているように思う。あるいは、自己実現の欲求が高い場合、Hさんのように「なんかもっとー、ね、髪型とか、なんか、ちゃんと、ちゃんとしたいなみたいな（笑）なんだろ、ちゃんとしたいなって思う」と現状に満足せず、向上心が見えるタイプも存在する。

自己評価では、「女子力」がないとしているものの、女性の被調査者全員が他者から「女子力」があると言われた経験があったという事実にも注目したい。その例をいくつか挙げていこう。例えば、Aさんは、友達とファミレスに行った際、小腹が空いたため、サラダを頼んだら、一緒にいた友達に「女子力」と言われたという。その時、Aさんの友達は、甘いものを頼んでいたが、Aさん自身は、甘いものが食べたい気分ではなかったための選択であり、カロリーを気にしていたわけではないと語った。そして、Cさんの「なんか、私、アクセサリを全く身につけないんだけど、なんか、学校に毎日つけてたら、最近女子力高いねって言われた（笑）」というエピソードを話してくれた。この2つの例は、他者から「女子力」と言われたとき、本人が意図しない行為について、外側から女子力と関連付けられて意識させられたというパターンである。一方、Gさんの場合は、「あ、彼氏に会った時に、あ～、やっぱ、髪型とか、ちょっとかわいく、かわいくっていうか、ね、アレンジとか、ちょっと、巻いたり、ま、いつも巻いてるけど、なんか、ちゃんと、化粧とかも、怠って…なんていうのかな、怠らないっていうか、そういうところに、ふと言われる時がある。なんか、お前、お前さ～、女子力あるよねみたいな。うれしかった。さすがと思った」というエピソードを挙げた。この場合、自己が意識して「女子力」を発揮したときに、他者から評価をされたパターンである。いずれにせよ、自身の「女子力」とは、他者を介してのみ自覚されるということであろう。それと同時に、「女子力」と言われることは、基本的にうれしいこととして肯定的に捉えられていた。

では、「女子力」とは、個々人にとって、どのような位置づけなのだろうか。あなたは「女子力」が必要だと思うかという問いに対して、必要であるという意見とあまり必要ではないという意見に分かれた。Aさんは、「女子力なんていらないうちやいらないうのかもんじゃないよね。だって、身だしなみ整えるのが女子力って言ったら、それはちがくね？その、身だしなみにプラスして、何かやってる人を見て、女子力って言うかもしれない…だから、ただ単に、カレーが作れる

人を女子力とは言わない。タイ式スープカレーを作った人が女子力高いみたいな（笑）そういう感じ？」と答えた。身だしなみは人として、あるいは女子として必要ではあるが、それ以上のことを要求する「女子力」はそこまで必要ではないということであろう。対して、Cさんは、「女子力」はなくても困らないとしながらも、「なんか、女子力あった方がその、他人からも褒められるし、自分のことも大切にできそうだし。…でも、なくてもいいけど、なんだろう…。じ、自分を、なんだろうね～。より、なんだろう、輝かせるもの？（笑）」と述べた。自己を大切にしつつ、他者からの評価を得られる「女子力」はさらに「女子」である自分を高めるという。Hさんは真っ向から必要であるという意見として、「自分高められる。なんか、うん、誰かに会う時とか、化粧とか、ちゃんとしたり、髪型とか整えた方が、なんか、気合入るし、テンション上がるし…うん。高められる」と語る。まさに女の子の価値は、可愛いことであり、他者の「鏡」に映る自分こそが「女の子」としての自分であると捉えているのではないだろうか。そして、Iさんも同様に「…女子力ってか、普通のことを怠ったら、結構、なんですかね、外見とか、人の見た目…印象とか結構変わると思うので、あった方がいいなあって思います。その、周りの人の害にならないように（笑）」と述べている。やはり、女の子にとって、内側の自分よりも、他者の視線である外側の自分を気にすることが「女らしさ」なのである。つまり、「女子」は、もともと「女子」として生まれるのではなく、他者の視線や期待によって、「女子」になるということであろう。それを実現することで、「女子」となり、「女子」として生きていくことを受け入れるのではないだろうか。その時に、「女子力」は、「女子」としての自分の価値を高めるための効果を持っている。

## （5）メディアの影響と「女子力」の消費活動

第1章では、「女子力」という言葉は、ファッション誌から誕生し、メディアが戦略的に利用したことで普及したと説明した。その影響を受けているのは、間違いないと以下に挙げる語りで証明できるだろう。Gさんは、「なんか、たぶん、だって、なんか、モデルさんとかをさ、雑誌とかで見るとさ、なんか、めちゃくちゃケアとかしてるじゃん。ボディのケアとかさ、ハンドのケアみたいな。全くしてないし、なんかさ、別にそれが女子力とは限らないと思うけど、なんか、え、それやっぱ、女子として大事なあとか思う」と語る。「女子」のバイブルであるファッション誌のモデルがしていることは「女子」の中の「女子」とみなされているようである。そのファッション誌に取って代わる役割を果たしているのが、ソーシャルメディアである。「インスタとかツイッターに写真…、料理の写真とかあげてる人とか、あ、女子力高いなあ～って」というCさんの言及に示されるように、SNSは若者にとって、ファッション誌にかわる情報ツールであり、「女子力」をさらに広めた立役者であろう。今やおしゃれに関する情報は、雑誌からではなく、SNSから発信され、個々人から発信されている。続けて、「なんか、オーガニック食品を食べてるとか（笑）なんか、スムージー飲んでるとかね」とCさんは話す。まさに、「女子力」という言葉が消費と結びついていることを表す発言と言える。「オーガニック食品」や「スムージー」などといった商品を消費することが、結果的に、「女子力」につながるのでは

る。その意味で、「女子力」という言葉の拡散と共に、女性向け市場における若い女性たちの消費活動が促されている。女子たちは、「女子力」のイメージを積極的に消費しているのである。つまり、メディアの戦略的な使用が成功し、「女子力」という言葉は、「女子」を能動的に「女子」であることへと向かわせたと言える。

そして、今回の調査から「女子力」の内容は、みんながしていることの $+\alpha$ ということで定義づけられる。女の子の国では、お互いが監視し合い、みんな同じであることがルールである。自分自身についてIさんは、「やっぱ、その…う～ん。してるのが全部普通のこと、なんていうか、その、ケアしたりするのって、なんていうか、女性では当たり前のことっていう認識がちょっとあるので～、それを女子力っていうのは、自分はですけど」と述べた。「女子」であるためには、みんながしていることが基準であり、それをしないことは、「女子」ではないとみなされる。「女子」ならみんなしていることという、暗黙の了解が女の子の国には存在している。

しかし、そのルールを「女子力」は少しだけ超越することを可能にするというのも、インタビューから読み取ることができた。「やっぱ、料理と洗濯、掃除？とか、裁縫とか。そういうのがやっぱ、女の仕事っていうか。もう、それを、やっぱするのは、何となく女の子って思うけど、それにプラスアルファの人が、あ、プラスアルファのことしてるのが、女子力？」とAさんは語った。ただし、その $+\alpha$ というのが、実現可能な範囲であるということにも注目したい。例えば、「それが、なんか、普通の今日カレー作った～！とかそういうのじゃなくって、なんか今日、なんだっけな…なんか入りなるとかなんか式カレー作った～！みたいななんか、そこだわってるみたいなのを作ってる子がいて、それは、すごいな」とAさんが話すように、みんなが普段していることに、ほんの少し工夫を加えることで、オリジナリティーを演出することが可能になる。その「ほんの少し」の「工夫」が「女子力」を実現する。あまり難しいことではなく、ちょっと頑張ればできることが「女子力」であり、それは、逆に言えば、誰にでも行えることであり、誰にでも手に届くことであり、したがって「女子」の横並びの関係性を脅かさないとも言えるのである。だからこそ $+\alpha$ として成立するのである。それに加えて、「女子」たちが伝統的な女性役割を自らが手に入れようとしていることが示唆される。だからこそ、彼女たちは、メディアが提示する「女子力」をほんの少し頑張ることで手に入れようと、「女子力」をうたった商品を購入し、「女子力」アップを目指しているのだろう。

## (6) 「女子力」男子

最後に、「女子力」男子について言及していこう。若者研究を専門とする原田曜平は『女子力男子～女子力を身につけた男子が新しい市場を創り出す』という書籍において、「女子力」男子を市場経済の観点から論じている<sup>52</sup>。原田は、2009年以降、男子の「女子化」を指す言葉が台頭してきたことを男子の「進化」だと捉えている<sup>53</sup>。草食系男子を始め、弁当男子、乙男（オトメン）、イクメンなど、これまでの男子像とは異なる印象を持つ男子たちの存在をこれらの言葉は示している<sup>54</sup>。「女子力」男子を「従来、女性がやっていたり、得意とされたりした領域の力が備わっている男性」と原田は定義する<sup>55</sup>。そして、「女子力」男子が頭角を現してきた理由

を、原田は4つ挙げている。1つは、男性の雇用の不安定化と女性の社会進出という経済的要因である<sup>56</sup>。2つ目は、「男らしく」という社会的抑圧の減少である<sup>57</sup>。3つ目は、ソーシャルメディアの普及により、男女間のコミュニケーションの変化である<sup>58</sup>。4つ目は、母親世代の若年意識による友達感覚の親子関係である<sup>59</sup>。実際に、原田は、20代前半の「女子力」男子81人に定性的なインタビュー調査を実施し、おおまかな傾向によって、「女子力」男子を4つのグループに分類している<sup>60</sup>。「女子力」と括るには、あまりにも細分化していることが実情であることを意味している。また、菊地の調査によると、男性の場合でも、29%が「女子力」が高いあるいは低いと言われたことがあると答えている<sup>61</sup>。本調査の男性グループインタビューより、「え、たまに。だって、それこそ、最初に皿を回したりすると、あっ！とか言って(笑)」とDさんが話すことから証明される。「女子力」は、「女子」にのみ当てはまる言葉ではない。

さらに、原田によれば、「女子力」男子は主に大都市部に多く存在するとしているが、本調査でも「女子力」男子の存在が語られていることから、地方部にもその広がりを感じ取れる。例えば、「最近、男性でもなんか、ネイルしたり～、こう気を遣ってるじゃないですか？私の近くに、一人だけいて。バックとか毎日するみたい。すごい、日焼け止めもすごい念入りに塗るみたい。子がいるんですけどー、それを聞くと、あ、負けてるな、女子力負けたなあみたい。高すぎみたい。ことは言ったことありますね。」とIさんは話した。これまでの時代であったら、男子自身が他者の目を気にして、男子が美容やスキンケアに気を遣うことを公に語ることはなかったであろう。そのハードルが低くなっていることが若者の男女に見て取れる時代になったと言えるだろう。一方、Gさんは、「なんか、匂いに気遣ったりとか、なんか、自分の身の回りの、ねえ、ケアとか、ちょっと怠ってない感じが、あ、女子力高っ！とか言って、ほめたことがあります。なんか、顔にさ、化粧水塗ったりとかさ、ちょっと、衝撃的だったけど、あ、今どきの男子ってするんだって思った」と、最初は戸惑ったが、「女子力」男子の存在を肯定的に受け取ったという。しかし、Bさんが述べるように、「ほんとに程度による。自分よりめっちゃはるかに女子力高かったら、ちょっとないなあ～って思う(笑)めっちゃ気が引けるけど～、ある程度あったら、いいなって思う」と、「女子」としてのプライドなのか、男子に「女子力」を超越されることは「女子」としての自分の存在価値が揺るがされかねないと思っているようであった。以上のことから、「女子力」男子は、これまでの男女の固定的な役割規範を覆し、新たなジェンダー関係を築いていくことを可能にするような力も秘めているように思われるのである。

## 終章

これまでの分析をまとめていこう。まずは、前章1節では、若い男女の間で、「女子力」は若さと結びつき、同世代間でのみ通用する若者の間の言葉として捉えられていると述べた。そして、「女子力」とは、ファッションなどの外面と家事能力などの内面どちらにおいても気を遣うこととして解釈されており、それらの解釈は、伝統的な女性役割を内包していると言える。この点から、若い男女の間では、「女子力」は従来の伝統的な女性役割という価値観を脅かすものではなく、さらに、彼・彼女たちの間でこうした価値観が内面化されていることを示しているとも

言えるだろう。

次に、2節と3節では、女子による「女子力」の使い方と男子による「女子力」の使い方が異なることを指摘した。女子が「女子力」という言葉を使う場合、常にほめ言葉として使っている。これにより、「女子」という共同体の絆を深めつつ、「女子」であることを互いに意識する作用を含んでいると言える。一方、「男子」が「女子力」という言葉を使用する場合、「女子力」が「ある」よりも「ない」ということの方が顕著であり、「女子力」が既存の女性役割が担えるかという判断基準として利用されていることがわかる。両者は、異なる利用のされ方をなしているが、既存の「女らしさ」という価値観を意味作用として持っているという点において、共通性を持っていると言えるだろう。さらに、「女子力」が高すぎたり、完璧であったりすることに対しては、男女ともに否定的な意見が発せられた。「女子」にとって、それは、「みんな」という横並びの関係を保てなくする危険性があるからである。また、「女らしい」というのは、男の子に上手に負けることも意味しており、従属的な価値観が作用しているからでもある。一方、男の子の国では、勝つことが唯一絶対のルールであり、相手が女子であってもそのルールが適用されるからである。

次に、4節では、女性の被調査者たちの語る「女子力」についての自己評価と他者評価の違いにふれた。自分自身について「女子力」がないとしたものの、他者に「女子力」があるとされた経験を誰もが持っていた。それは、内側の自分より、外側の他者からみた自分こそが女の子であるというルールと結びつく。自分自身の「女子力」は、自己ではなく、他者を介してのみ意識されるものであることが判明した。可愛くなければ女の子ではないという意識が「女子」には潜在的に備え付けられているからだろう。「女子」として、価値があるのは、内側の自分ではなく、他者から見た外側の自分であることを女の子たちは理解しているのである。

そして、5節では、ファッション誌から誕生した「女子力」が戦略的に使用されたことによって、女性向け市場の消費活動が活発化され、女性自身が積極的に「女らしさ」を体現する方へ向かわせたと述べた。さらに、「女子力」は、ソーシャルメディアの普及によって、自己と他者を比較することで捉えられ、同時に消費活動を促す効果をもたらした。その際、「女子力」はみんながしていることの $+ \alpha$ として定義づけられ、「女子」という横並びの関係を脅かさずに少し超越することを可能にした。それは、その「女子力」というものが、ちょっとした工夫や頑張りによって、手にすることができる実現可能な範囲にあるものだからである。

最後に6節では、「女子力」男子を取り上げ、社会の様相の移り変わりとともに、男女の関係性の変化を若者たちが肯定的に受け入れ、既存のジェンダー役割の構造を揺るがす可能性も示唆した。「男らしさ」や「女らしさ」あまり意識せずに生きていこうとする若い男女の価値観は、将来のジェンダー意識を変化させ、社会を大きく変えていくかもしれない。

ここからは、本調査と先行研究を比較してみよう。1章2節では、「女子力」をめぐる解釈は主に2つあると指摘した。1つは、西森や水無田が論じている男性を惹きつけるための「女子力」である。もう1つは、河原や米澤が論じている古典的な女性の役割や規範を逸脱する女性の総合能力としての「女子力」である。本調査では、「女子力」は外見の若さや美しさとともに家庭的な内面性という「女らしさ」と強固に結びついて解釈されていることが、被調査者の語り



から明らかになった。それは、以下の語りからも明白である。「やっぱ、女の子だし～、やっぱ、男にはできない、できない、こと…いや、分かんないけど～、そういうと、ほら、偏見になるけど…。やっぱね、女として生まれたからには、やっぱ、かわいい服とか着たいしさ～」とGさんは述べている。また、Hさんは、「だって、せつかく女の子に生まれたからには…なんか、女の子らしくいたいじゃん。…明るいとか、なんか、天真爛漫的な（笑）なんか、女の子らしくないですか？」と話す。さらに、Bさんは、「なんか、女の人は、ちょっと、一歩下がるというか～、なんだろう、なんか、ちょっと古風な考え。なんかめっちゃ、前に出ると言うよりは、さりげなく、あっ、いつの間にか取り分けてみたいな」と語った。

「女子力」という言葉の使用を通じて、彼女たちは、「女の子」だから、「女の子」らしく、「女の子」として生きていこうというジェンダー役割を積極的に再生産していると言えるだろう。個々人の解釈する「女子力」は、米澤の述べる脱良妻賢母規範としての「女子力」という議論は通用しないのではないだろうか。むしろ、菊地が指摘している従来の「女らしさ」を女性自身が積極的に獲得しようとしている側面が、「女子力」という言葉がどのように解釈されているか、どのように使われているかを分析することによって、浮き彫りになったと言えるだろう。また、メディアが戦略的に使用してきた「女子力」は、SNSなどのソーシャルメディアを通じて、「女子」の消費意欲を駆り立て、彼女たちに女子力をもたらす商品の積極的な消費者として、一人一人を立ち上がらせている。つまり、女子たちは、主体的に、女子力イメージを消費しているのである。そのことによって、彼女たちは、外側から強制されてではなく、自ら欲して「女子」になっていくのである。

結論として、若い男女による女子力の解釈やその使用の仕方から明らかになったのは、女子たちが、能動的に女性役割を内面化することに参加し、また、能動的に、女子イメージの消費者となっているということである。「女子力」にみられるこの能動性は、結果的には、伝統的ジェンダー役割規範を脅かすものではなく、むしろ再生産するものとして、作用していると言える。個々人の女性役割という意識の内面化は、この能動性を通して助長されていると指摘できるだろう。また、「女子力」という言葉が男性に使われる場合、ジェンダー関係を揺るがす可能性も「女子力」が秘めていることを指摘したが、他方で、「女子力」をめぐる女子たちによるジェンダー役割規範の主体的再生産と積極的消費もまた、強固なあり方で、存続している。「女子力」という言葉の広まりによって、女性たちはさらに女性性を内面化し、また「女子力」を掲げた消費活動を促されるだろう。本調査では、若い男女を対象とした極めて限定的な結果を分析した。本議論の妥当性は、今後の「女子力」研究の課題としたい。

---

#### 註

- 1 米澤泉『「女子」の誕生』勁草書房、2014年、3頁。
- 2 同書、4頁。
- 3 川原和枝、「『女子』の意味作用」、馬場伸彦・池田太臣編『「女子」の時代！』青弓社、2011年、24頁。
- 4 米澤、前掲書、3頁。

- 
- 5 光文社の40代新専業主婦向け雑誌『STORY』の美容版として、2009年に創刊された『美STORY』(現在は『美ST』)に登場する30代後半以上の驚異的な若さと美しさを誇っている女性読者モデルを「美魔女」と呼ぶようになったことがきっかけである。
  - 6 米澤、前掲書、185頁。
  - 7 同書、185頁。
  - 8 同書、41頁。
  - 9 同書、39頁。
  - 10 馬場・池田、前掲書、11・12頁。
  - 11 小倉千加子『オンナらしさ入門(笑)』理論社、2007年、128頁。
  - 12 馬場・池田、前掲書、31頁。
  - 13 同書、30頁。
  - 14 たとえば、子どもたちのゲームでもめごとが生じたとき、男児は、たとえ友情を犠牲にしてもルールに従ってゲームを終えようとする事が多く、一方、それとは対照的に、女兒は友情を守るためにルールを変更したり、ときにはゲームそのものをやめてしまったりするという。同書、30頁。
  - 15 同書、27頁。
  - 16 同書、30頁。
  - 17 米澤、前掲書、9頁。
  - 18 同書、10頁。
  - 19 米澤、前掲書、5頁。
  - 20 河原、前掲書、21頁。
  - 21 同書、22頁。
  - 22 米澤、前掲書、6頁。
  - 23 同書、7頁。
  - 24 米澤、前掲書、7頁。
  - 25 同書、190頁。
  - 26 同書、192頁。
  - 27 馬場・池田、前掲書、23頁。
  - 28 米澤、前掲書、191頁。
  - 29 ジレンマ+編集部編『女子会2.0』NHK出版、2013年、106頁。
  - 30 菊地夏野「『女子力』とポストフェミニズム—大学生の『女子力』使用実態アンケート調査から—」『人間文化研究』25号、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、2016年。
  - 31 同書、46頁。
  - 32 同書、45頁。
  - 33 同書、45頁。
  - 34 小倉、前掲書、28頁。
  - 35 同書、29頁。
  - 36 同書、37頁。
  - 37 同書、52頁。
  - 38 同書、56頁。
  - 39 同書、60頁。
  - 40 同書、60頁。
  - 41 同書、102頁。
  - 42 同書、129頁。
  - 43 斎藤美奈子『紅一点論—アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』ちくま書房、2001年。
  - 44 同書、35頁。
  - 45 同書、28頁。
  - 46 盛山和夫『社会調査法入門』有斐閣、2004年、262頁。
  - 47 谷富夫・芦田徹郎『やわらかアカデミズム・(わかる)シリーズ よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房、2009年、72頁。

- 
- 48 同書、76頁。
  - 49 同書、76頁。
  - 50 菊地、前掲書、40頁。
  - 51 「男性が思う”女子力”とは-「男性を立てる」「花嫁修業」「表に出すぎない」」マイナビニュース、2014年7月9日 (<http://news.mynavi.jp/news/2014/07/09/326/>) (2017年1月9日閲覧)
  - 52 原田曜平『女子力男子～女子力を身につけた男子が新しい市場を創り出す』宝島社、2014年。
  - 53 同書、13頁。
  - 54 同書、13頁。
  - 55 同書、17頁。
  - 56 同書、66頁。
  - 57 同書、71頁。
  - 58 同書、75頁。
  - 59 同書、78頁。
  - 60 同書、108頁。
  - 61 菊地、前掲書、28頁。

#### 参考文献

- 雨宮まみ『女子をこじらせて』ポット出版、2011年  
安野モヨコ『美人画報』講談社、2004年  
安野モヨコ『美人画報ハイパー』講談社、2006年  
安野モヨコ『美人画報ワンダー』講談社、2006年  
上野千鶴子『女ざらいーニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店、2010年  
小倉千加子『オンナらしさ入門(笑)』理論社、2007年  
越智博美・河野真太郎『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」 格差、文化、イスラーム』彩流社、2015年  
菊地夏野「『女子力』とポストフェミニズムー大学生の『女子力』使用実態アンケート調査からー」『人間文化研究』25号、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、2016年  
古賀令子『かわいいの帝国』青土社、2009年  
斎藤美奈子『紅一点論ーアニメ・特撮・伝記のヒロイン像』ちくま書房、2001年  
斎藤美奈子『モダンガール論』文藝春秋、2000年  
酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社、2003年  
ジレンマ+編集部編『女子会2.0』NHK出版、2013年  
竹内一郎『人は見た目が9割』新潮新書、2005年  
谷富夫・芦田徹郎『やわらかアカデミズム・(わかる) シリーズ よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴェ書房、2009年  
蜷川実花『オラオラ女子論』祥伝社、2012年  
馬場伸彦・池田太臣編『「女子」の時代!』青弓社、2011年  
林真理子『美女入門』マガジンハウス、1999年  
林真理子『野心のすすめ』講談社現代新書、2013年  
原田曜平『女子力男子～女子力を身につけた男子が新しい市場を創り出す』宝島社、2014年  
松谷創一郎『ギャルと不思議ちゃん』原書房、2012年  
盛山和夫『社会調査法入門』有斐閣、2004年  
米澤泉『「女子」の誕生』勁草書房、2014年  
米澤泉『私に萌える女たち』講談社、2010年  
米澤泉『コスメの時代ー「私遊び」の現代文化論』勁草書房、2008年

---

**参考URL**

「男性が思う“女子力”とは-「男性を立てる」「花嫁修業」「表に出すぎない」」マイナビニュース、2014年7月9日 (<http://news.mynavi.jp/news/2014/07/09/326/>)

(卒業論文指導教員 虎岩 朋加)